# Tissue engineering により作製したインスリン産生細胞における インスリン分泌調節性に関する研究

 中井
 望
 根本昌実
 佐々木
 敬

 田嶼尚子

東京慈恵会医科大学内科学講座糖尿病・代謝・内分泌内科

(受付 平成19年11月16日)

# DEVELOPMENT OF A REGULATORY SYSTEM FOR INSULIN SECRETION FROM GENETICALLY ENGINEERED CULTURE CELLS

Nozomu NAKAI, Masami NEMOTO, Takashi SASAKI, and Naoko TAJIMA

Division of Diabetes, Metabolism and Endocrinology, Department of Internal Medicine, The Jikei University School of Medicine

To develop a novel control method for the secretion of insulin by tissue-engineered cells, we evaluated the inducible secretion of substances from engineered culture cells at both the transcriptional and exocytotic levels *in vitro*. To evaluate transcription, we took advantage of a physically inducible promoter, the heat shock element (HSE) of the heat shock protein gene, by ligating it to either a modified human proinsulin cDNA (INS/fur) that mediates processing of insulin in nonendocrine cells or to the secreted alkaline phosphatase (SEAP) gene. Significant increases in the concentration of human insulin in the culture medium were observed only when we stimulated the engineered C2C12 mouse myoblasts with teprenone (geranylgeranylacetone), a drug commonly used to treat gastritis and ulcers, but failed to detect any significant increase in the insulin concentration in any other cell types. Significant increases in SEAP activity in culture media following heat shock were observed with all cell types evaluated. The results suggest the feasibility of transcriptional control of transgene expression by activation of the HSE combined with heat shock or chemicals. To examine exocytosis, on the other hand, we used glucagon-like peptide-1 (GLP-1), which is secreted from small intestinal cells and is a combined receptor of pancreatic B cells, and stimulated insulin secretion in different types of cell lines, including endocrine cells that constitutively express the insulin gene and were engineered with the GLP-1 receptor gene. When insulinsecreting AtT20 cells were stimulated with GLP-1, a significant increase in the concentration of insulin was observed in the culture medium. However, no significant change in insulin secretion was detected when nonendocrine engineered cells were used. The results suggest that the combination of engineered cell types and the level of control must be considered in the construction of regulatory systems with engineered insulin-secreting cells.

(Tokyo Jikeikai Medical Journal 2008; 123: 151-61)

Key words: heat shock protein, insulin, glucagon-like peptide-1, teprenone

I. 緒 言

私たちは、今までに生物学的に活性を持つイン スリン分泌が可能な細胞を作製し、1型糖尿病や インスリン分泌能が著しく低下した2型糖尿病の 基礎インスリン分泌を補う新規治療法の開発を 行ってきた<sup>1)2)</sup>.その中でマウス線維芽細胞由来の 前脂肪細胞である3T3-L1細胞にインスリン遺伝 子を導入し, streptozotocin 誘発性1型糖尿病モ デルマウスの腹腔内に細胞移植を行ったところ, 移植しないコントロール群では高血糖が持続した のに対し、移植マウスでは血糖は降下したものの 低血糖のため死亡した。この実験結果から、イン スリン産生細胞の治療効果は認められたが、その 効果を制御することが重要な課題として残され た. 生理的にはインスリンは膵臓の *β* 細胞で生合 成され、細胞質の分泌顆粒内に蓄えられる.最も 強力な分泌刺激因子はグルコースである.グル コースが糖輸送担体を介して細胞外から細胞内に 移動し、細胞内で代謝され ATP を産生する、これ がKATP チャネルを閉鎖して細胞膜の脱分極をお こし, 電位依存性 Ca チャネルを活性化する. こう して Ca<sup>2+</sup>の細胞内への流入を経て、細胞質に存 在するインスリン分泌顆粒が細胞膜と融合し、細 胞外へ開口放出される(Fig.1)<sup>3)</sup>.本研究では遺伝 子改変によりインスリン分泌の調節を可能にする ため、2つの方法を検討した。第一は、転写レベル で調節を行う方法である.プロモーター活性を変 化させ,下流に存在するインスリン遺伝子の mRNA 転写レベルでの調節性が得られれば、イ ンスリン分泌を調節することができると考えられ る. そこで今回はプロモーターと接続したインス リン遺伝子あるいは分泌型 alkaline phosphatase (SEAP) 遺伝子をマウス筋芽細胞の C2C12, マウ ス下垂体内分泌細胞のAtT20,マウス前脂肪細胞 の3T3-L1等の培養細胞へ遺伝子導入した。作製 した各種遺伝子導入細胞株を熱または薬剤で刺激 し、インスリンや SEAP の反応性を観察した。第 二の方法はインスリン開口放出レベルにおける分 泌調節機構の開発研究である. 転写レベルの調節 では,刺激を加えてからインスリンが分泌される までに数時間を要すると考えられる。そこで私た ちは、より速いタイミングで代謝調節を行うため に、β細胞に対するインスリン分泌刺激因子であ る glucagon like peptide-1 (GLP-1) を用いて開 口放出レベルでの分泌調節の検討を行った。 GLP-1 はインクレチンの一種であり、下部小腸に 存在するL細胞から放出される消化管ホルモン





The GLP-1 stimulates the cAMP PKA pathway to secrete insulin granules that is coupled to a stimulatory G-protein (Gs) and a calcium-calmodulin-sensitive adenylate cyclase (Ac).

ン分泌を促す<sup>4)5)</sup>. この GLP-1 の受容体である GLP-1 receptor (GLP-1R) を,インスリン分泌 が可能な非膵  $\beta$  細胞に遺伝子導入した.さらに作 製した細胞に対して,GLP-1 での刺激を行い,イ ンスリン分泌調節を検討した (Fig. 1).

### II. 材料と方法

## 1. プラスミドの構築

生理的なインスリンのプロセッシングは膵 $\beta$ 細胞の細胞質に存在する prohormone convertase (PC1/3, PC2)によって行われる<sup>6</sup>, 非内分泌, 非膵 $\beta$  細胞においては, そこで発現するプロテ アーゼ, furin によってプロセッシングを受けるよ う認識部位の塩基配列を変換した改変型インスリ ン遺伝子, insfur<sup>7)</sup>を用いた。発現ベクターでは insfur 遺伝子を heat shock protein (hsp70) 由来 のプロモーターである heat shock element (HSE)の下流に挿入した。さらにレトロウイルス ベクターのエンハンサー/プロモーターである Long Terminal Repeat (LTR) の影響を避ける ため, LTR の方向とは転写が逆向きに起こるよう に接続してベクタープラスミドを作製した (Fig.

これらの目的のためプラスミド構築を以下の通 り行った。制限酵素 Sal I と Bgl II にて pSEAP2 -Basic (全長 4.7 kbp, Clontech, CA, USA) より SEAP 遺伝子を切り出した. 一方ベクター pLXSN (Clontech, CA, USA)のLTRの下流に insfur 遺伝子が組み込まれた pLinsfurSN (6.2 kbp) から EcoR I と BamH I にて insfur 遺伝子 を切除し、ここに SEAP 遺伝子を pLXSN の LTR とは反対の方向に転写されるように組み込 むことで pLSEAPSN (7.7 kbp) を作製した.こ れに HSE をクローニングするため pLSEAPSN を EcoR I にて切断し、LTR とは逆向きに SEAP 遺伝子が転写される方向となるように HSE を ligation し, pLSEAP-HSESN (8.9 kbp) を構築 した.次にLTR と同じ方向に insfur 遺伝子が組 み込まれた pLinsfurSN から BamH I, EcoR I に て insfur 遺伝子を切り出し、 逆方向に ligation す ることで pLinsfurSN (6.2 kbp) を作製した.これ を EcoR I で 切断 し, HSE を insfur 遺伝子 に LTR とは逆の方向へligationし, pLinsfur-HSESN (7.4 kbp)を構築した. HSE 遺伝子は、マ ウス熱誘導タンパク質である hsp70A1 (Gen-Bank; M76613, bases 1 to 1040) を用いた. GLP-1R 遺伝子は, Bernard Thorens 教授 (スイ ス Lausanne 大学)より分与された<sup>8)</sup>. 以上のプラ



Fig. 2. Plasmid construction

a, b The retrovirus vector for expression of SEAP and the modified insulin cDNA (insfur) under control of the HSE promoter that is connected in an opposite direction to LTRs. c Insfur-expression vector with LTRs.

d GLP-1receptor (GLP-1R) expression vector with the CMV promoter.

Plasmid a and b; for the evaluation of the level of transcription, plasmid c and d; for the evaluation of exocytosis.

スミドの作製には, DNA Ligation Kit Ver.2, DNA Blunting Kit, 形質転換用大腸菌 DH5-*a* competent Cell(宝酒造)を用いた.

## 2. 細胞培養

C2C12 細胞(理化学研究所),AtT-20細胞 (ATCC,VA,USA)は10% fetal bovine serum (FBS),3T3-L1細胞(理化学研究所)は10%calf serum(CS),50 U/ml Penicillin,50  $\mu$ g/ml Streptomycin (GIBCO, CA, USA)を含む,Dulbecco's modified Eagle's medium (DMEM)を培地に使 用し,細胞を5%CO<sub>2</sub>,37°Cの条件下に100 mmの プレート (CORNING,NY,USA)で培養した. 細胞は80~90% コンフルエントの状態でPBS (-)で2回洗浄後,0.05% trypsin+0.01% EDTA を用いて10倍希釈で100 mm プレートに継代培 養を行った.なお PBS(-)は以下の組成のもの を使用した.1,000 ml 中,塩化ナトリウム 800 mg, 塩化カリウム 200 mg,リン酸一水素ナトリウム 1,150 mg,リン酸二水素カリウム 200 mg.

#### 3. 遺伝子導入細胞の作製

1) 転写レベル

100 mm プレートあたり 1×10<sup>5</sup> 個の C2C12 細 胞, 3T3-L1 細胞または AtT-20 細胞をプレー ティングした. 24 時間後に プラスミド DNA (pLSEAP-HSESN, pLinsfur-HSESN) 4 $\mu$ gを LipofectAMINE PLUS (Invitrogen, CA, USA) を用いてトランスフェクションした. さらに 24 時 間後, 100 $\mu$ g/ $\mu$ l G418 (SIGMA, CA, USA) 含 有の選択培地に交換後,2週間培養し,96 穴プレー ト (CORNING, NY, USA) 1 枚に限外希釈して 播種した. 全ての細胞から6 個のコロニーを培養 し,6種の細胞, C2C12/pLSEAP-HSESN, C2C12/pLinsfur-HSESN, AtT20/pLSEAP-HSESN, AtT20/pLinsfur-HSESN, 3T3-L1/ pLSEAP-HSESN および3T3-L1/pLinsfur-HSESN を樹立した.

2) 開口放出レベル

Insfur 遺伝子と GLP-1R 遺伝子を同一細胞に 共発現させ、GLP-1 刺激によってインスリンの分 泌が亢進されるかを検討した。AtT20 細胞、 C2C12 細胞に LipofectAMINE PLUS を用いて pLinsfurSN 4 $\mu$ gをトランスフェクションした。 その 24 時間後、100 $\mu$ g/ $\mu$ lの G418(SIGMA, CA、 USA)含有培地に交換して1週間培養し、96 穴プ レート (CORNING, NY, USA) 2 枚に限外希釈 して播種した.両細胞とも6 個のコロニーを培養 し、C2C12/pLinsfurSN,AtT20/pLinsfurSN を 樹立し、6 穴プレート (CORNING, NY, USA) 2 枚に1×10<sup>5</sup> 個ずつ播種し直した.プラスミド DNA (GLP-1R) 1  $\mu$ g を LipofectAMINE PLUS を用いてトランスフェクションした.こうして作 製したAtT20/pLinsfur-GLP-1RSN および C2C12/pLinsfur-GLP-1RSN の6 個のクローン 細胞をそれぞれクローンA,B,C,D,E,Fと命名 し、以下の実験に用いた.

- 4. 刺激と測定
- 1) 転写レベル
- (1) Teprenone による薬剤刺激

細胞質に存在する heat shock factor-1 (HSF-1) は、細胞に対する種々の刺激や teprenone (geranylgeranylacetone)により活性化する<sup>9)</sup>.本 研究では, HSE を介する teprenone の転写誘導 性について検討した. Teprenone (エーザイ)を 100% エタノールで溶解して 1×10<sup>-2</sup> M 溶液を作 製した. 血清を含んだ DMEM で 1×10<sup>-2</sup> M 溶液 を希釈し、1×10<sup>-4</sup> M、1×10<sup>-5</sup> M、1×10<sup>-6</sup> M 溶 液の希釈系列を作製し、コントロールは同量のエ タノールを含んだ溶液とした。各々固有の遺伝子 が組み込まれた6種類の細胞を、それぞれ2枚の 6穴プレートに1×10<sup>5</sup>個ずつプレーティングし なおし、24時間後に通常の10%FBSを含む DMEM に培地交換を行った。この際2ml ずつの teprenone 含有培地へ交換し曝露を行った. Teprenone 刺激開始24時間後のプレートより培地 を回収し,SEAP 活性またはインスリン濃度を測 定した.

(2) 熱刺激

熱刺激により HSE の下流に接続した SEAP 遺伝子および insfur 遺伝子の転写活性化能の促 進が可能かどうか検討した。6 種類の細胞をそれ ぞれ 6 穴プレート 2 枚に、 $1 \times 10^5$  個ずつプレー ティングし、24 時間後に培地交換を行った。6 穴 プレートの1 枚は、 $42^{\circ}$ C、5%CO<sub>2</sub> の条件下で1.5 時間の熱刺激を加え、その後 37°C に戻した。コン トロール群は、 $42^{\circ}$ C の熱刺激を行わず 37°C に静 置した。熱刺激の 24 時間後に、それぞれのプレー

トから培地を採取し,SEAP 活性またはインスリ ン濃度を測定した。SEAP活性の測定には Reporter Assay Kit SEAP (東洋紡) を用いた. 各群の培地を20 µlづつ96 ウェルマイクロプ  $\nu - \downarrow$  (C96 WHITE MAXISORP 437796, Nunc, DK)に移し, 20 µ1の内在性 AP 阻害液を 加え混合し,37°C で 30 分間反応させた。その後, 1分間氷上に静置し、160 µlの化学発光試薬 (Lumi-Phos Plus, 東洋紡)を混合した。 遮光状態 のまま 37℃ で 30 分間反応させ、ルミノメーター を用いて7秒間の発光量を測定した。SEAP 活性 値は,刺激を付加していない細胞培地中の細胞 1×10<sup>6</sup> 個あたりの SEAP 活性を1とした相対値 で評価した。一方インスリンは、それぞれの細胞 における培養上清から刺激前と刺激後900 µ1 ず つ培地を採取し,抗原抗体反応を用いた2ステッ プサンドイッチ Enzyme Immunoassay 法 (LS 試 薬栄研インスリン, 栄研化学) により測定した.

開口放出レベル

GLP-1 (amide fragment 7-36 human, SIGMA-ALDRICH MI, USA)は1% 酢酸溶液で 溶解した. この100  $\mu$ M 溶液を無血清の DMEM により作製した.C2C12/pLinsfur-GLP-1RSN お よび AtT20/pLinsfur-GLP-1RSN の6穴プレー トより,刺激前,100 nM のGLP-1による刺激後 30分,60分,120分での培養上清を採取し,抗原 抗体反応を用いた2ステップサンドイッチ Enzyme Immunoassay 法によりインスリン濃度 を測定した.

#### III. 結 果

## 1. 至適 teprenone 濃度の検討

Teprenone 刺激を行うに先立ち, プロモーター (hsp) を活性化し, その下流の遺伝子を発現させ るために最適な teprenone の培地中濃度を探索 した. C2C12/pLinsfur-HSESN に対し, 異なる濃 度の teprenone 含有培地, および teprenone を含 まないコントロールにて, 培養細胞に対し刺激を 行った結果,  $1 \times 10^{-4}$  M 濃度の teprenone 刺激が, コントロールに対し有意なインスリンの増加を示 した (Fig. 3). 一方  $1 \times 10^{-5}$  M,  $1 \times 10^{-6}$  M 濃度の teprenone 刺激では, コントロールと比較し有意



Fig. 3. Teprenone-induced insulin secretion from C2C12/pLinsfur-HSESN cells.

We generated C2C12/pLinsfur-HSESN cells by transfecting C2C12 with the vector in which the insfur cDNA is expressed by the HSE promoter. We stimulated the cells with different concentrations of teprenone. Twenty-four hours after stimulation, we measured human insulin levels in the medium. Human insulin was significantly increased in the  $1 \times 10^{-4}$  M teprenone exposure group compared to the control group (\*P < 0.01, N = 3). However no significant difference was observed in the  $1 \times 10^{-5}$  M,  $1 \times 10^{-6}$  M teprenone exposure group and the control group.

差を認めなかった.以上の結果より C2C12/pLinsfur-HSESN に対しては, 1×10<sup>-4</sup> M 濃度の teprenone を用いることとした.

# 2. Teprenone 刺激によるインスリン濃度ま たは SEAP 活性の変化

Hsp プロモーターによりインスリンあるいは SEAP が発現する筋芽細胞 C2C12 を用いて、teprenone の効果を検証した. Teprenone で刺激し た群では 1.38 µU/ml のインスリンを検出可能で あったが,コントロールではインスリンは検出さ れなかった(Fig. 4). 同条件下で分泌産物をイン スリンの代わりに SEAP として検討した結果,コ ントロールと比較して、1×10<sup>-5</sup> M濃度のteprenone 刺激で SEAP 活性に有意差を認め, teprenone 刺激による転写亢進を検出した (Fig. 5). また1×10<sup>-4</sup> M 濃度の刺激では活性が大幅に低 下し、1×10<sup>-6</sup> M 濃度の刺激では有意差を認めず、 転写亢進は検出できなかった.次に hsp プロモー ターによりインスリンあるいは SEAP が発現す る内分泌細胞 AtT20 を用いて、teprenone の効果 を検証した.刺激24時間後の培地中インスリンを



Fig. 4. Teprenone-induced insulin secretion from the C2C12/pLinsfur-HSESN cells. We stimulated C2C12/pLinsfur-HSESN cell with  $1 \times 10^{-4}$  M teprenone. After 24 hrs, we measured human insulin in the medium. The level human insulin was 1.38  $\mu$ U/ml in the teprenone exposure group, but was not detected in the control group (N.D., Not Detected; N=3).



Fig. 5. Teprenone-stimulated SEAP excretion from the C2C12/pLSEAP-HSESN cells. SEAP activity was measured in the medium after stimulation for 24 hrs. SEAP activity was significantly increased by exposure to the  $1 \times 10^{-5}$  M teprenone compared to the control (\*P < 0.01, N = 3). RLU, relative luciferase unit.

測定した結果, teprenone 刺激の有無に関係なく, インスリンは検出感度以下であった. 同条件下で 分泌産物をインスリンの代わりに SEAP として 検討したが, teprenone 刺激による転写亢進は検 出できなかった. 同様に hsp プロモーターにより インスリンあるいは SEAP が発現する前脂肪細 胞 3T3-L1 を用いた場合も teprenone によるイ ンスリンの転写亢進は検出できなかった. しかし 同条件下で分泌産物をインスリンの代わりに SEAP として検討した結果, 培地のみのコント ロールと比較し, 1×10<sup>-5</sup> M 濃度の teprenone 刺 激で有意な転写亢進を検出した (Fig. 6). また 1× 10<sup>-4</sup> M 濃度の刺激では SEAP 活性は大幅に低下





Table 1. Summary of the results of the transcriptional induction experiments. Three kinds of transformed cell lines were stimulated by heat shock or teprenone exposure, and the concentration of human insulin or SEAP activity were measured in the culture medium. Following teprenone exposure, human insulin and SEAP activity were increased significantly in the medium of C2C12 cells compared to control cells. The SEAP activity was also increased significantly in the culture medium of 3T3-L1 cells compared to control cells. However, there was no significant difference between the SEAP activity of AtT20 cells and control cells. In the heat shock experiments, SEAP activity was significantly increased in the C2C12/SEAP-HSESN and AtT20/SEAP-HSESN cells compared to the control cells. There was no significant difference detected between the SEAP activity with 3T3-L1/ SEAP-HSESN cells and the control cells.

Call	Disamid	Stimulation	
Cell	Flasillu	Teprenone	Heat
C2C12	Insfur	↑	$\rightarrow$
C2C12	SEAP	$\uparrow$	$\uparrow$
AtT20	Insfur	$\rightarrow$	$\rightarrow$
AtT20	SEAP	$\rightarrow$	<b>↑</b>
3T3-L1	SEAP	$\uparrow$	$\rightarrow$

し、1×10<sup>-6</sup> M 濃度の刺激ではコントロールと比較し有意な転写亢進を検出できなかった(Table 1).



# 熱刺激による培地中インスリン濃度または SEAP 活性の変化

Hsp プロモーターによりインスリンあるいは SEAP が発現する筋芽細胞 C2C12 を用いて, 熱刺 激の効果を検証した. 熱刺激 24 時間後に培地中の インスリンを測定した結果, 熱刺激の有無に関わ らずインスリンは検出感度以下で, 熱による転写 亢進を検出できなかった. 同条件下で分泌産物を SEAP として検討した結果, 熱刺激を加えた群は 熱刺激を加えない群と比較し 1.5 倍の SEAP 活 性増加を認め, 熱による転写亢進を検出した(Fig.



Fig. 7. SEAP activity of the culture medium of C2C12/pLSEAP-HSESN cells after heat shock.

SEAP activity of the culture medium 24 hrs after stimulation of the C2C12/pLSEAP-HSESN cells with heat shock (42°C, 1.5 hrs). The SEAP activity was significantly increased by the heat shock compared to the non-stimulated group (\*P < 0.01, N = 6).



Fig. 8. SEAP activity of the culture media of AtT20/pLSEAP-HSESN cells, after stimulation by heat shock. SEAP activity of the culture media 24 hrs after stimulation of the AtT20/pLSEAP-

HSESN cells by the heat shock (42°C, 1.5 hrs). The SEAP activity was increased significantly by the heat shock compared to the non-stimulated group (\*P < 0.001, N = 6).

7). 同様に hsp プロモーターによりインスリンあ るいは SEAP が発現する内分泌細胞 AtT20 を用 いて熱刺激の効果を検証した.熱刺激の有無に関 わらずインスリンは検出感度以下であったが,分 泌産物を SEAP として検討した結果,熱刺激を加 えた群では熱刺激を加えない群と比較し 1.63 倍 の SEAP 活性増加を認め,熱による転写亢進を検 出した (Fig. 8). 同様の実験を hsp プロモーター によりインスリンあるいは SEAP が発現する前 脂肪細胞 3T3-L1 を用いて行ったが,熱刺激の有 無に関わらず,インスリン, SEAP とも熱による 転写亢進を検出できなかった (Table 1).

 GLP-1R 刺激を介する培地中インスリン 濃度の変化

内分泌細胞を用いたインスリン産生細胞に、 GLP-1R遺伝子を導入して作製したAtT20/ pLinsfur-GLP-1RSNの6つの細胞クローンA ~Fに対しGLP-1溶液で曝露刺激を行った。100 nMのGLP-1溶液で刺激したクローンA, B, C では、刺激120分後の培地中インスリンに増加を 認めた。しかし刺激を加えなかったクローン D, E, Fでは、インスリンは検出感度以下であった (Table 2).次に筋芽細胞を用いたインスリン産生 細胞にGLP-1R遺伝子を導入して作製した C2C12/pLinsfur-GLP-1RSNのクローンA~F

Table 2. Insulin secretion from AtT20/pLinsfur-GLP-1RSN cells, by GLP-1 stimulation. After 120 minutes of stimulation of AtT20/pLinsfur-GLP-1RSN cells with 100 nM GLP-1, the concentration of human insulin in the culture medium was increased with clones A, B, and C, while human insulin was not detected with clones D, E, and F (control with no GLP-1). IRI (mol/L) : immunoreactive insulin.

	Clone	Before GLP-1	After GLP-1 (120 min)
	А	1.16	3.95
+	В	1.10	6.58
	С	< 1.00	1.52
_	D	<1.00	< 1.00
	Е	< 1.00	< 1.00
	F	< 1.00	< 1.00

に対し,同条件下でGLP-1の刺激を行ったが, GLP-1刺激の有無に関係なく,刺激120分後の培 地中インスリンは検出感度以下であった。

#### IV. 考 察

1型糖尿病や内因性インスリン分泌が著しく低 下した2型糖尿病に対しては、頻回の皮下インス リン注射法が現在最も確立された治療法である が、この注射法に代わる治療法として、ポンプ療 法や膵島移植がある。可溶性インスリンを専用ポ ンプで微量づつ持続的に皮下注入する CSII (Continuous Subcutaneous Insulin Infusion) は、頻 回注射では不安定な血糖コントロールの患者に適 応となる10).一方, 膵島移植は, ドナーの膵臓から 分離した膵島を移植する治療方法で、エドモント ンプロトコールと呼ばれている良好なプロトコー ルがある11)。しかし免疫抑制や倫理面で大きな問 題を抱えている。私たちは、この様な従来の治療 とは異なる,自己の細胞治療の基礎的検討を行っ た. 自己の細胞を用いて tissue engineering を行 い、作製した細胞を自身へ移植することで、非自 己を排除するという免疫の問題もクリアできるの ではないかと考えた、これまでの研究結果から、イ ンスリン分泌に調節性を加えることが不可欠とい うことがわかっていたので,糖尿病に対する遺伝 子治療の実現を目指し,転写レベルと開口放出レ ベルでのインスリン分泌調節について検討した.

転写レベルでのインスリン分泌調節の検討のた めに、熱ショックタンパク質 (hsp)の転写調節領 域に存在し、ストレス時の発現を制御する HSE をプロモーターとして利用した。Hsp は通常、細 胞への 42°C, 1.5 時間の熱刺激で活性化される特 徴を持つことから、HSE をインスリン遺伝子と接 続しプロモーターとして用いることで、インスリ ンの分泌に調節性を加えることが可能となり得る と考えたのである。本実験を行う前に予備実験と して、HSE と接続した SEAP 遺伝子を C2C12 細 胞に導入して作製した細胞に対して熱刺激を行 い、その時間経過を追跡した。その結果、熱刺激 16 時間後より培地中の SEAP 活性の上昇が超こ り、30 時間付近まで SEAP 活性値の上昇が確認 できた (data not shown)。培地中の SEAP 活性 は hsp の活性化を経て一定時間後の活性化状態 を示している。よって転写実験には分泌タンパク 質の上昇が確実と思われる 24 時間後にて評価す ることにした。

転写レベルにおける分泌調節の検討として、teprenone 刺激による SEAP 活性またはインスリ ン濃度を測定した。その結果, insfur 遺伝子を導入 した C2C12 細胞および SEAP 遺伝子を導入した C2C12 細胞と 3T3-L1 細胞で teprenone 1×10-4  $M\sim1\times10^{-5}$  M によるインスリンまたは SEAP の分泌亢進を認めた. すなわち teprenone が HSE システムを介して下流の遺伝子であるイン スリンあるいは SEAP のmRNA 転写を促進し たと考えられた。ところが他の細胞を用いた実験 では、1×10<sup>-4</sup> M の teprenone 刺激にて多くの細 胞が死亡した.この結果から,高濃度の teprenone 曝露による細胞毒性のため、細胞の形態変化は認 めないが、傷害を受けた細胞からインスリンが漏 出した可能性も考えられた. 転写レベルでの実験 に用いた teprenone は臨床的に胃炎や潰瘍など に対し頻用されている薬剤である. Teprenone を 用いた in vitro の実験では、細胞の種類は異なる が主に1×10<sup>-6</sup>~1×10<sup>-8</sup> M 程度の teprenone 刺 激で細胞内 hsp の増加が認められている<sup>12)</sup>.本実 験では、通常の実験に用いられるよりも高濃度の teprenone を用いたことは、細胞傷害の可能性が 支持される. Teprenone が効果を発現するには, 細胞質に存在する HSF-1 を活性化し、活性化さ れ三量体となった HSF-1 が核内の DNA 上流に ある HSE へ結合し、下流遺伝子の mRNA 転写 を促進するという過程が必要である12)13). HSF-1 の活性化が無効あるいは HSF-1の HSE への結 合が無効な場合は,理論的に全ての細胞でインス リン濃度や SEAP 活性は増加しないと考えられ る. 高い分泌能力を期待し, 内分泌細胞の AtT20 細胞を用いたが、導入遺伝子の種類に有意な関係 は認められなかった. Teprenone 刺激が効果を発 揮できない原因として,上記の過程に問題がある 可能性が考えられる.本実験では下流に接続した 遺伝子により teprenone の有効濃度が異なった 結果が得られたが,唯一インスリン濃度の増加が 確認できた C2C12 細胞での結果が細胞毒性によ るものではないと仮定すれば, 下流遺伝子の

mRNA 転写促進に問題があると考えられる.その理由は導入遺伝子の種類により至適 teprenone 濃度は異なるためと考察される.

熱刺激の結果, HSE-SEAP 遺伝子を導入した C2C12 細胞や AtT20 細胞ともに、熱刺激 24 時間 後に熱刺激なしの群と比較し有意な SEAP 活性 の増加を認めたことから, 42℃, 1.5 時間の熱刺激 がmRNAの転写亢進を引き起こしたと考えられ た。この実験では、異なった細胞種でも熱刺激が 有効であることが確認できた. しかし 3T3-L1 細 胞を用いた同様の実験では、熱刺激24時間後に SEAP 活性の増加を認めず,熱による転写亢進は 検出できなかった。HSE-SEAP 遺伝子を導入し た 3T3-L1 細胞では teprenone 刺激にて SEAP 活性の増加を認めているが、熱刺激に反応しな かった原因としては, HSE-insfur 遺伝子を導入 した同細胞も、熱刺激による反応を認めていない ことから (data not shown), 3T3-L1 細胞自体が 熱による傷害を受けた可能性が考えられた。

また insfur 遺伝子を導入した C2C12 細胞と AtT20細胞に対し上記同様の熱刺激を行った結 果,熱刺激後にインスリンを検出することはでき ず,熱による転写亢進は検出できなかった.この 結果からは、導入遺伝子 SEAP とインスリンの違 いが考えられた.SEAP はインスリンと比較し て、非常に安定したタンパク質であり、その分泌 過程も単純である。しかしインスリンは細胞内で の産生から、細胞外への分泌にいたるまでの過程 はきわめて複雑であり、細胞外へ分泌されたイン スリンも,SEAPと比較して不安定である.これ らの導入遺伝子の違いより,同様の条件下での熱 刺激実験においても SEAP では活性の増加が確 認できたが、インスリンは検出感度以下であった と考えられた。各種細胞に対し teprenone 刺激と 熱刺激にて実験を行った結果、インスリンが検出 感度以下となることが多いため, ベクター pLXSN には既に 3'LTR に polyA signal が付加 されているが, target gene であるインスリン遺伝 子の下流にmRNA 安定化を目的として polyA signal の付加を行った. AtT20 細胞へ polyA signal を付加した insfur 遺伝子を導入し,作製した 細胞に熱刺激を行った結果、熱刺激前に検出感度 以下であったインスリンは,熱刺激後に検出可能

となったが、熱刺激を行った群では熱刺激を行わ ない群よりも培地中インスリンは抑制された。こ の結果から熱刺激がインスリン分泌に対し悪影響 を与えた可能性が考えられたため、同様のAtT20 細胞を用いて1×10<sup>-5</sup> M 濃度の teprenone 刺激 を行った。しかし teprenone 刺激を行った群で は、熱刺激と同様に培地中インスリンが抑制され た (data not shown). なぜ polyA signal を付加 したことで、熱刺激や teprenone 刺激によりイン スリン分泌を抑制する結果となるのかは不明であ る.本実験では恒久的な遺伝子導入細胞を作製す るためにレトロウイルスベクターを用いたが. hsp プロモーターを介して下流遺伝子の活性化を 評価するための実験には,LTR を持たない一般的 な CMV プロモーターを持つベクターを用いて同 様のプラスミドを構築し、さらなる条件の検討が 必要であると考えられる.

開口放出レベルでのインスリン調節性について は Table 2 に示したように、AtT20 細胞にインス リン遺伝子とGLP-1R遺伝子を導入した細胞は, GLP-1 刺激にて刺激 120 分後に培地中インスリ ン濃度の増加を認め,GLP-1がGLP-1Rに結合 し細胞内の cAMP 濃度を上昇させ、インスリン分 泌を促したと考えられた。一方 C2C12 細胞を用い た実験ではGLP-1刺激を加えても培地中インス リンは検出感度以下であった。この結果について は、実験に使用した AtT20, C2C12 両細胞の性質 の違いに関係していると考えられる. AtT20 細胞 はマウス下垂体腫瘍由来の内分泌細胞であり、内 分泌装置は発達しており、プロインスリンからイ ンスリンへのプロセッシングに必要な酵素発現も 認める.一方でC2C12細胞はマウス筋芽細胞由来 の間葉系細胞であり、インスリン分泌に必要な内 分泌装置は通常存在しない. GLP-1R を遺伝子導 入し受容体を持つ細胞を作製することが可能で も,分泌能力や分泌過程を有さない細胞では, GLP-1 刺激を行っても有効ではないと考えられ た.

本研究結果より、転写レベルでのインスリン分 泌調節については、自己の細胞を体外で *ex vivo* 処理したインスリン分泌細胞を体内移植し、teprenone や加温にて分泌を促すことで、インスリ ンの基礎分泌を少しでも補うことができる可能性 が示された.またこのシステムは自家移植を用い ており,移植に伴う拒絶反応の問題も発生しにく いと考えられる.インスリン開口放出レベルでの 分泌調節については,食事によって小腸のL細胞 から分泌された GLP-1が,自己の細胞を用いて 作製した GLP-1R を持つインスリン産生細胞を 刺激しインスリン分泌を促すことで,インスリン 追加分泌による食後高血糖の是正が期待できる.

#### V. 結 語

Tissue engineering により作製したインスリン 産生細胞において、hsp プロモーターや GLP-1R の利用はインスリン分泌に調節性をもたらす可能 性があると考えられた.

本稿を終えるにあたり、ご指導、御校閲を賜りまし た東京慈恵会医科大学 DNA 医学研究所所長 衛藤 義勝教授に謹んで謝意を表すとともに、本研究に御協 力下さった同遺伝子治療研究部の諸先生方、東京工業 大学大学院生命理工学研究科 小畠英理助教授,柳田 保子講師に深く感謝いたします.

なお,本研究は第46回日本糖尿病学会総会(2004 年5月横浜),第2回1型糖尿病研究会(2004年10月 山梨)において発表した.

#### 文 献

- Yamasaki K, Sasaki T, Nemoto M, Eto Y, Tajima N. Differentiation-induced insulin secretion from nonendocrine cells with engineered human proinsulin cDNA. Biochem Biophys Res Commun 1999; 265: 361-5.
- Sasaki T, Fujimoto K, Sakai K, Nemoto M, Nakai N, Tajima N. Gene and cell-based therapy for diabetes mellitus: endocrine gene therapeutics. Endocr Pathol 2003; 14: 141-4.
- Easom RA. Beta-granule transport and exocytosis. Semin Cell Dev Biol 2000; 11: 253-66.
- Fehmann HC, Goke R, Goke B. Cell and molecular biology of the incretin hormones glucagon-like peptide-I and glucose dependent insulin releasing polypeptide. Endocr Rev 1995; 16: 390-410.
- Gromada J, Holst JJ, Rorsman P. Cellular regulation of islet hormone secretion by the incretin hormone glucagon-like peptide 1.

Pflugers Arch 1998; 435: 583-94.

- 6) Steiner DF, Rouille Y, Gong Q, Martin S, Carroll R, Chan SJ, et al. The role of prohormone convertases in insulin biosynthesis: evidence for inherited defects in their action in man and experimental animals. Diabetes Metab 1996; 22: 94-104.
- Smeekens SP, Montag AG, Thomas G, Albigesrizo C, Carroll R, Benig M, et al. Proinsulin processing by the subtilisin-related proprotein convertases furin, PC2, and PC3. Proc Natl Acad Sci USA 1992; 89: 8822-6.
- Thorens B. Expression cloning of the pancreatic beta cell receptor for the gluco-incretin hormone glucagon-like peptide 1. Proc Natl Acad Sci USA 1992; 89: 8641-5.
- 9) Zou J, Guo Y, Guettouche T, Smith DF, Voellmy R. Repression of heat shock transcription factor HSF1 activation by HSP90 (HSP90 Complex) that forms a stress-sensitive complex with HSF1. Cell 1998; 94: 471-80.
- American Diabetes Association. Continuous subcutaneous insulin infusion. Diabetes Care 2002; 25 (Suppl 1): S 116.
- 11) Shapiro AM, Lakey JR, Ryan EA, Korbutt GS, Toth E, Warnock GL, et al. Islet transplantation in seven patients with type 1 diabetes mellitus using a glucocorticoid-free immunosuppressive regimen. N Engl J Med 2000; 343: 230-8.
- 12) Hirakawa T, Rokutan K, Nikawa T, Kishi K. Geranylgeranylacetone induces heat shock proteins in cultured guinea pig gastric mucosal cells and rat gastric mucosa. Gastroenterology 1996; 111: 345–57.
- Morimoto RI. Regulation of the heat shock transcriptional response: cross talk between a family of heat shock factors, molecular chaperones, and negative regulators. Genes Dev 1998; 12: 3788-96.
- Davies EL, Shennan KI, Docherty K, Bailey CJ. Expression of GLUT2 in insulin-secreting AtT20 pituitary cells. J Mol Endocrinol 1998; 20: 75-82.
- 15) Motoyoshi S, Shirotani T, Araki E, Sakai K, Kaneko K, Motoshima H, et al. Celluar characterization of pituitary adenoma cell line (AtT20 cell) transfected with insulin, glucose transporter type2 (GULT2) and glucokinase genes: insulin secretion in response to physio-

logical concentration of glucose. Diabetologia 1998; 41: 1492-501.

16) Suda T, Katoh M, Hiratsuka M, Takiguchi M, Kazuki Y, Inoue T, et al. Heat-regulated production and secretion of insulin from a human artificial chromosome vector. Biochem Biophys Res Commun 2006; 340: 1053 -61.

17) Wu L, Nicholson W, Wu C-Y, Xu M, McGaha A, Shiota M. et al. Engineering physiologically regulated insulin secretion in non-β cells by expressing glucagons-like peptide 1 receptor. Gene Ther 2003; 19: 1712-20.